神皮文化の集い
～中野政男先生・安西喬先生を偲んで～

日時：１月22日（日）15：00～
場所：横浜シンポジア
実行委員長　幹事長　鎌田英明

平成23年は、東日本大震災を皮切りに日本にとって悲しみに満ちた年となりましたが、神奈川県皮膚科医会にとっても、３月３日に安西喬先生が、また７月16日に中野政男先生と、神皮創設に大きく関わられた大先輩が相次いでご逝去された悲しい年でした。お二人は、神奈川県皮膚科医会の創設に深く関わられたばかりではなく、その後の神皮の発展にも大きくご尽力されました。現在の神奈川県皮膚科医会が各方面から注目される医会となることができたのも、お二人ならびにご苦労を共にされた多くの先輩達の御功績だと感謝しております。今回の集まりは、その中心におられたお二人を偲ぶとともに、改めて神奈川県皮膚科医会の歴史を振り返る会として計画されました。

しかし、単なる追悼の会というのではなく、神皮らしい楽しく、かつ教養も深められる会として企画して欲しいとの、ご遺族でもある栗原会長の強いご希望もあり、スタッフで意見を出し合いながら企画を立て、手作りの会として開催いたしました。

講演会の司会進行は不肖わたくし鎌田が務めさせていただき、まずトップバッターとして野村有子先生のご主人、野村卓史日大理工学部教授のライフワークともなっている「風」のことを分かりやすくおまとめいただいた「風の話～よい風･わるい風～」のご講演をいただき、皆「風」への認識を新たにしました。続いて神奈川県皮膚科医会の会誌「神皮」の制作をお願いしているかまくら春秋社の社主もお務めの、関東学院大学教授伊藤玄二郎先生の「谷崎潤一郎『刺青』とその周辺」のご講演に興味をそそられました。夫々が普段あまり私共の接することのない分野のお話でもあり、より新鮮で興味深いものでした。

更に、50年近い神皮の膨大な資料をおまとめいただき、「中野政男・安西喬先生の追憶」と題された加藤安彦先生のご講演も感銘深く、改めて神皮の長い歴史に触れ、先人のすばらしさを感じました。

今回の集いには神皮会員ばかりではなく、お二人の母校関連の先生方や近県の医会の先生方にもご多忙にもかかわらず多数ご参加いただき、参加者は100名近いものとなりました。

講演会後の懇談会は、まず菅原信前会長に乾杯のご発声をいただき、川口博史、山川有子両先生の司会の下、中野、安西両先生に関連の深い先生方からの思い出話の披露で開始されました。中でも滝沢清宏先生の相変わらずの名調子にはみな引き込まれ、大きな笑いの渦が何度も起こっていました。

また中野、安西両先生もメンバーとしておおいに楽しまれた神奈川県皮膚科医会のゴルフ親睦団体「六六会」の写真展示コーナも会場の一角に設けられ、六六会の披露と会員の勧誘を、現六六会会長の日下部芳志先生がユーモラスに行われました。

宴もたけなわ、皆さんも大分アルコールが回ったところで、御酒も存分にたしなまれたお二人に因み、

名前を伏せた３種類のワインのランクを当てる「利き酒大会」が栗原誠一会長、増田智栄子副会長の司会で行われました。日頃舌に覚えのある先生方も迷いに迷われ、その様子に会場も大いに盛り上がりました。

コンセプト通りに教養を深め、また時間を忘れて楽しく過ごした会も、浅井俊弥副会長の中締めの挨拶で残念ながらお開きとなりました。

参加された皆さんから「またこのような会を開いて欲しい！」とのお声もいただき、天国のお二人にも楽しんでいただけたものと実行委員会一同思っております。合掌。

野村卓史氏

伊藤玄二郎氏

加藤安彦氏

会場風景

講師の先生方と

「乾杯」菅原信前会長

滝沢清宏氏

懇談会

懇談会

懇談会

懇談会

両手に余る花

利き酒大会

集合写真

中野、安西両先生へ六六会からの追悼文

眞海文雄●大森皮膚科クリニック（東京都大田区大森北）

神奈川県皮膚科医会に、六六会という一種、独特の趣味の会があるのを、ご存じでしょうか。

1966年、今から半世紀も前に発足したゴルフを趣味とする同好会ですが、初代会長である警友病院の大森周三郎先生や、中野政男、安西喬先生他、10数名で結成された会です。

時、まさにビートルズと全共闘の嵐に明け暮れた団塊の世代。世間の狂騒に反発して、気骨のある軍団が誕生しました。

1966年の六六と、エールリッヒの606号（サルバルサン）をイメージして六六会と名づけられました。

その目的とするところは、会員相互の親睦をはかり、心身を鍛錬し、もって神奈川県皮膚科医会の発展に寄与することにあります。

二ヶ月に一度、艦隊司令官と称する会長より会員各位に「大演習を行うにつき、公務、慶弔にあらざれば集結されたし」との召集令状が届き、はせ参じること、何と、290回を迎えようとしています。

よくもまあ、飽きもせず、文句も言わず、続けてきたものだと正常な人達からみれば、そう思うのが当然でしょう。

ところが、一度、入会してみると、この会の不思議な魅力に取り憑かれてしまう。

それが何なのか、たゞ単にゴルフが好きだというだけでは説明づけられない、もっと別の要因が存在すると思われます。

いつの頃からか、六六会に局中法度なるものが制定され、これに反する者は厳罰に処すとは言っても、別に切腹させられるわけではなく罰金刑を言い渡されて、有無を言わせず取り立てられたものです。

その局中法度なるものは、

一、紳士にあるまじきこと

一、勝手に休むべからざること

一、遅刻するべからず

一、許可なく脱会するべからず

一、立ち○○、放屁は、たとえ、それが匂いだけでもするべからず

多分に、世の乱れや、若者に対する軟弱さを憂えて、親父的な気骨を示したのではないかと思います。

戦後の民主主義が権利の主張に目覚める一方、義務というものをないがしろにする風潮に、敢然と立ち向かう時代錯誤的な軍団ともいえます。

会員の一人、今は亡き、原元会長の言葉が思い起こされます。

「高熱で寝込み、年が年だから」と顔面紅潮で抗議なさる古株の先生に、苛酷無残にも冷酷に、「寝込むとは不摂生である」と一喝し遠慮会釈なく罰金を取り立てる主計長の威容をみて、入会したての私の脳裡には、佐久間良子が、オカアサン、オネエサンに挨拶する『五番町夕霧楼』のワンシーンが横切りました。

「タイヘンなところに入りこんでしまったものだ、苦界に身を沈める心地で云々（うんぬん）」

そう述べる原先生も、実は鬼軍曹と呼ばれる怖い存在でした。かくも厳粛な会でありながら、不思議と違和感がなく、本音で語りあえる雰囲気がある。そして歴代の会長は、昔の親父よろしく厳格であると同時に、やさしく受け止める寛容さも持ち合わせている。

現代の日本から失われつつある正（まさ）に、一本筋の通った心棒としての存在が、そこにはありました。口舌の徒が蔓延（はびこ）る現代、事の善し悪しに拘わらず、断固、責任を取る覚悟で、ことにあたる輩（ヤカラ）が、どれほどいるのかを教えてくれる会ともいえます。

この情報過多の時代、人々に広がる不安感と不確実さは、ゆとりを失い、あてのない猛進を続け、休止符のない音楽を求めているように思われます。

旧（ふる）きもの必ずしも悪ではなく、そこに新しい発想を得る、我々、年寄りの悲しき抵抗の理屈です。

私が入会したての頃、中野先生より檄文が出されました。六六会の真髄は、まさに、これに集約されているものと思われます。

中野　平鎮長官より

新進気鋭の諸代なり。その罰金拠出能力と共に大

いに期待さるべし。六六会の情勢は加齢衰退、滅亡の兆、歴然たるものあり。

この間に於ける帝国海軍六六会会員諸官の使命は、一層、重、且つ大なるを覚えずんばあらず。キ下一同、益々自重自愛、日夜訓練に努め、己が威力を最高に維持すると共に、今回、新なる若き、眞海、滝沢、刈谷、栗原の諸官を迎え、以って国防の重荷に任じ、聖旨に応え奉らんことを期すべし。名文である。

巨星、堕(お)つ。中野、安西両先生は自分等の役割を果たし、後輩に譲ったが、我々は、先代から引き継がれている不屈の精神を引き継ぎ、世の中の動きに同調しない、いい意味での偏屈さだけは、持ち続けるつもりである。

六六会は、今、100年を目指して、今尚、活動中であるが、歴史を作るという事は、続けるという事です。ますます、この会が発展していく事を期待すると共に、六六会の歴史を作って下さった中野先生、安西先生の業績に感謝し、御冥福を、お祈り申しあげる長老会員の一人です。